平成三十一年度大学院博士後期課程入学試験問題

研究科名	科目名
文学研究科 人文学専攻 日本文学日本語学専修	専修共通問題 （Ｎｏ．１）

【問題】

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（設問の関係で、一部本文を改めたところがある。）

『万葉集』と『古今集』との歌風の相違についてはすでに十分に説かれていることと思う。ここにはその相違を通じて現われた[1]心の相違を問題にする。それを追究して行けば、何ゆえに『万葉』の時代が純粋に叙情詩の時代であり、何ゆえに古今の時代が物語文芸への過渡の時代であるかという問題も解き得られるであろう。

まず初めに歌に現わされた感情の相違について観察する。

範囲を狭く「春」に限って考えてみると、相違はきわめて明白である。『古今集』の巻頭に置かれたあの有名な、

年の内に春は来にけり一年（ひととせ）を去年（こぞ）とや言はむ今年（ことし）とや言はむ

の歌は、〔中略〕『古今集』の歌の一つの特性を拡大して見せていると言える。それは、ここに歌われている「春」が、直観的な自然の姿ではなくして暦の上の春であり、歌の動機が暦の知識の上の遊戯に過ぎぬという点に看取される。もとより叙情詩に歌われる春は必ずしも直観的な自然の姿でなくともよい。暦の上の春でもそれが詠嘆さるべき感情を伴なっていさえすればよい。たとえば少年の心が、一夜明けて新しい年になるというあの急激な変化に対して抱く強い驚異の念、あるいは暦の上の春が単なる人為的の区分でなくして何らか実体を持ったもののように感ぜられ、あたかも自然が暦の魔力に支配されているかのようなあの不思議な季節循環の感じ。それらは確かに強い詠嘆に価する。総じて暦なるものが、季節の循環と天体の運行との不思議な関係から生まれたものである以上、暦の知識の上に宇宙の深い理法への測るべからざる驚異の感情が隠されていることは否定し難い。しかし右の歌はこの驚異の情と何の関するところもない。季節循環の不思議さに対してはもはや何らの感情をも抱くことのできなくなった心が、ただ立春の日と新年との食い違いを捕えて洒落を言ったに過ぎぬ。それは詠嘆ではない。「［　A　］」として言（こと）の葉（は）になったものではない。従って歌ではない。

これは特にはなはだしい例である。しかし『古今集』の春の歌にはすべて多少ともにこの傾向が見られると思う。ここに『万葉集』の春の歌との第一の著しい相違がある。『万葉集』の歌は常に直観的な自然の姿を詠嘆し、そうしてその詠嘆に終始するが、しかし『古今集』の歌はその詠嘆を何らか知識的な遊戯の框（わく）にはめ込まなければ承知しない。春の初を詠じた二、三の歌を比較してみると、『古今集』では、

袖ひぢてむすびし水の氷れるを春立つ今日の風やとくらむ　（貫之、春上）

春がすみ立てるやいづこみよしののよしのの山に雪はふりつつ　（読人知らず、春上）

雪のうちに春はきにけりうぐひすの氷れる涙いまやとくらむ　（読人知らず、春上）

平成三十一年度大学院博士後期課程入学試験問題

研究科名	科目名
文学研究科 人文学専攻 日本文学日本語学専修	専修共通問題 （Ｎｏ．２）

のごときがある。これらはすべて「［　B　］」という暦の知識を軸として回転する歌である。今日は立春の日だから、あの思い出のある水の氷っているのを、春の風がとかしてくれるかも知れぬ。もう春になったから春霞が立っているはずだ、が、どこに立っているか、山にはまだ雪が降っている。まだ雪は降っているが、もう春になったのだから鶯は喜ぶだろう。明らかにこれらの歌は、直観的に春の到来を認めたものでない。水は氷っているが、しかし陽気はぬるんでいるとか、雪は降っているがしかしもう春めいて来たとか、というごとき詠嘆ではない。光景は冬である、が、暦の上では春が立った、その直観的ならぬ春を彼らは歌うのである。『万葉』の歌はこのような場合に全然反対に出る。

わがせこに見せむと念ひし梅の花それとも見えず雪のふれれば
あすよりは若菜つまむとしめし野に昨日も今日も雪はふりつつ
（以上二首、赤人、巻八）

ここにはすでに到来した春が冬によって引きとめられている光景の詠嘆がある。すでに梅の花は咲きほころびた、若菜は萌え出た、が、その春の歓びが雪によって妨げられる。いかに明らかに春が始まっているにもしろ、雪は依然として冬のものである。そうしてその、春を覆う雪を冬としてそのままに受け取ることのために、歌人の春に対する愛が一層強く響き出るのである。すなわちこの歌人は、ただ実感にのみ即するがゆえに、『古今』の歌人と反対の感じ方をしたと言える。なおまたこのことは、

時はいまは春になりぬとみ雪ふる遠き山べに霞たなびく　（中臣武良自、巻八）
うちきらし雪はふりつつしかすがに吾宅（わぎへ）の園に鶯なくも　（家持、巻八）

のごときについても明白に言える。光景は冬である。しかしそこにはすでに春が到来している。「春になったからもう霞が立つはずだのに、雪が降っている」ではなくして、「山には雪があるのにもうそこには霞がたなびいている、春になったのだ」である。「雪は降っていても春が立ったのだから鶯は喜ぶだろう」ではなくして、「雪は降っていてももう鶯が鳴いている、春が来たのだ」である。春の実感と暦の知識とが全然位置を替えるのである。

もとより『古今集』の歌は、右の引例のごとき単純なもののみではない。しかし[2]その複雑性は、直観をはめこむ知識の枠が一層複雑になるというに過ぎぬ。たとえば、

春やとき花やおそきと聞きわかむ鶯だにも鳴かずもあるかな　（藤原言直、春上）
木伝へばおのが羽風に散る花を誰におほせてこゝら鳴くらむ　（素性、春下）

平成三十一年度大学院博士後期課程入学試験問題

研究科名	科目名
文学研究科 人文学専攻 日本文学日本語学専修	専修共通問題 （Ｎｏ．３）

のごとき歌である。ここには鳥の音（こえ）、散る花などの印象が、単に暦の知識という以上に複雑な連想によって、屈曲されつつ現わされている。まず第一の歌は、「春が来てもまだ花が咲かぬ、春が早く来過ぎたのか、花が遅れたのか、鶯が鳴けばそれをきめることができるであろうが、鶯さえも鳴かない」という詠嘆であって、「春が来たとはいうが、鶯が鳴かぬ限りそういう気持ちにはなれぬ」とか、「谷から鳴き出てくる鶯の声がなくば誰も春には気づくまい」とかいう意味の歌とともに、鶯の鳴く音の歓ばしい感じを根本の動機としていることは疑いがない。しかしこれらの歌人は、その感じに深く浸り入ろうとはしないで、むしろそれを内容の確定した概念のごとくに取り扱い、「春」という概念との結合関係のうちに主たる関心を持っているように見える。従って鶯の声の内に春を感ずるというよりも、鶯において春を考えるのである。

（和辻哲郎「『万葉集』の歌と『古今集』の歌との相違について」『日本精神史研究』）

問一、文中の空欄部Ａには、『古今集』の「仮名序」にある有名な語句が入る。その語句を、五文字程度で記せ。

問二、文中の空欄Ｂに入る語句を本文の内容から考えて、二～四文字で記せ。

問三、文中の傍線部１「心の相違」について、本文の内容に即して説明しなさい。

問四、文中の傍線部２の内容を、本文に即して具体的に説明しなさい。